
魔法の国のティカ

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国のティカ

【Nコード】

N2177BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚される。たまたま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囲まれてうるたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

00 わたしのハゲ抹茶

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス」

残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなって連呼した。

今外に出たら暑いだろうなー。あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷った後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買
いに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー？」

二階の部屋から階段を降りていくと、リビングにいる母親から声
をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行ってくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買ってきてよ」

「うん、分かった。行ってくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「……あつっ……蝉うるさー……」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。

照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどのコンビニに着く
と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。

自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイ
スが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。
すると、目の前にきらきら光るものが見えてきた。

やだ、ガラス？ 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、
なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かずに自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素っ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるといきなり停止した。

「おおっ！？」

放り出されるかと思って、千花は女子にあるまじき声を上げる。しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るものがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！？」

光の洪水が治まると、千花はまったく見知らぬ場所にいた。——
それも、どう見ても室内。

千花が呆然としていて、目の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビ二袋を取り出した。

——緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言っていると思う。千花が今までお目にかかったことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろう。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれていると、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやっと千花ははっと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てると男に向かって叫んだ。

「ちよっ、わたしのハゲ抹茶！勝手に食べないでよ！」

「禿マツチヨ？ おかしな名前だな。もう一つあるだろう、それを食べろ」

「なんであなたに指図されなきゃいけないのよ、禿ドロボー！」

楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？ 俺は禿げてない。……ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですってえええっ」

あまりの言われように、千花は思わずきいっと叫びたくなる。

「いらないのならそちらも俺が貰うが」

「！ 食べる、食べるわよっ」

千花は慌てて男からコンビ二袋を奪い返した。そして溶けかかったいちごのかき氷をかきこむ。

「う」

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「うるさいよ！」

一声叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目ファントジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているというおかしな構図が出来上がったのである。

01 どうやら異世界らしい

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なにか突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろうか。

『カイル、召喚魔法をやたらと使うと言ったはずだが。またおまえは使ったのか』

千花のアイスを奪った男に文句を言っているようだが、なんとなくべつていいのか千花には理解できない。

「……誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のような格好をしている。

いや、それ以前にここはどこなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じゃなかった。

千花の疑問には二人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……師匠は弟子を取れと言った。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法ってなによ？ ファンタジー小説とかゲームじやあるまいし」

いくら目の前の男の格好がファンタジーでも、言ってることまでそんなことってある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が目の前の男から更に距離を取る。

『……なにを言ってるのか分らん。ひょっとして異世界の者が？』

「そうだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して目の前の男と壮年の男の会話が進む。

『……おまえ、なんてことをしてくれたんだ。異世界の者を召喚した。今すぐ帰すんだ』

「そついうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になってもら

わなければ」

「弟子ってなによ？　なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子って、なにかの伝統芸かなにかだろうか？

なににせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだった。

「後で説明する。おまえは少し黙ってろ」
「なっ」

そっけなく男に一蹴されて、千花は気色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだろう。それをこちらの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだろう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主であることには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ」

「魔力ってなによ？　勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなった。
な、な、なによこれーっ！？

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだろう？」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かった」

よく分からないが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるように話して欲しいものだ。そう思っ
て、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壮年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なっ、なにあれ？　なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄って左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさった。

しかし、男がなにかを呟いたとたん、体が動かなくなっただけで千花は焦る。

な、な、なんだこれー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろう。……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれっ？　話が分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かって短くなにかを呟く。

「……ちよつと、ここはどこなのよーっ！？」

話せるようになったとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかったか？」

「そう言うわけにもいかないだろう。少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？　聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」

いせかい。異世界。異世界！？

「あはははは、冗談きつついわ」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたって真面目な表情だ。……すぐには信じられないのも仕方ないだろうな」

壮年の男がなにごとかを呟くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちよ、うそっ！　足、体浮いてるっ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」

カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての！」

「まあ、そうかもしれないな。だが、落ちないから大丈夫だ」

壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？　ここはヨーロッパかなにか？」

「もしかしくなくても城だが、おまえの言うようなヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてもすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国の中心。魔法大国の顔でもある」

壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。

「さつきから魔法、魔法って……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？　さつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言うのと二人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なっ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかない」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんという」

偉そうに言われて、千花は力チンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗ったらどうよ？」

「……なんだと。——まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ。魔術師？ やっぱり鳩とか出すあれじゃないの？」

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな」

「ティカ・サトー？」

「ティカじゃなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。良ければティカと呼ばせてもらっていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしょうがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、ティカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子ってなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポンジか？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕った。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。ティカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい」

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですって？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをかの世界から喚び寄せた。どうしても帰りたいたら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかった高等魔法だな」

「ちよつと、勝手なこと言わないでよ！ わたしはあんたの弟子になるなんて一言も言っていないわよ！ わたしは的意思是どつなつちやうわけ！？」

「はつきり言えない」

きつぱりとカイルが言うつと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいかな？ まさか召喚魔法で弟子を喚びだすなんて普通思わんだろう」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの二人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、ここは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで喚びだしたわけね？ それで、その理由は弟子を取るからだったと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあつさりと頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないってことよね？」

「そついうことになるな。まあ、諦めろ」

——諦めろと言われて、そう簡単に諦められるかつての！

「そうなんだー。ふふふ」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に往復ビンタを思い切りお見舞いした。

02 結局、異世界生活

「……なにをする!」

カイルは打たれた頬を押さえて一瞬呆気にとられた後、千花に怒鳴った。

「それはこっちの台詞よ。あんたのやったことは犯罪じゃないの。誘拐よ、誘拐」

千花が腰に手を当てて声を大にして主張する。

「まあ、そういうことになるな」

シモンが鷹揚に頷く。

「あんたを警察……があるかは知らないけど、警備の人に突き出してやるんだから!」

「出来るものならやってみろ。言っておくが俺は城に顔が利くぞ。多少のことなら揉み消せる。それに、どこから見ても異国の者のたわごとを信じる人間がどこにいるんだ」

——この悪党!

ギリギリと歯ぎしりしたい思いで、千花はカイルを睨みつける。

「そんなことより、素直に俺の弟子になれば生活の保障はされるし、いつかは帰れるぞ」

「生活の保障なんて当たり前でしょ! そっちが喚びだしたんだから!」

「弟子にならない場合はおまえの生活の保障は一切ないからそのつもりでいろ」

「ちよつと!」

ふざけんな! どれだけ自分勝手なんだ。

憤った千花はカイルよりも立場的に偉いはずのシモンに助けを求める。

「じゃあ、シモンさんどうにかしてください!」

「すまない、それはちよつと出来かねる」

「な、なんですか？」

「こいつは俺の弟子だが、実力は俺をとうに上回ってるんだ。だから、君を保護した場合、俺がこいつにどうにかされる可能性がある」
「おおい、こいつには師匠を敬う気持ちはないのか！」

「師匠を師匠とも思っていないカイルに思わず千花が頭を抱える。

「でも、シモンさんから仕官できないなら弟子を取って言われたって」

「それは、第二王子のご命令だからだ。俺だけの命令ならば、こいつは聞かない」

「……」

命令を聞くのは、王族だけとかどんだ俺様なんだ。……けど、シモンさんもちよつと情けなくない？

「あ、じゃあ、その第二王子様とやらに、わたしを帰すように掛け合ってください」

「そ、それは、少々無理だと思うが……」

「ちえつ、やっぱり無理か。」

千花ががっかりしていると、カイルが更に言ってきた。

「俺の弟子になるならば、出来るだけ早く帰せるように尽力してやる。生活面も待遇を良くするぞ」

「……どんなにわたしが帰りたいって言っても、帰してくれないんだよね？」

「ああ、おまえがこれほどの魔力の持ち主でないならすぐに帰していたが、俺を上回るほどの魔力の持ち主だからな。これなら第二王子も文句は言うまい」

……その第二王子って人もまさか召喚してまで弟子を取ろうとするとは思わないと思うよ。

「うつゝ……」

千花は頭を抱えて唸る。

ああ、どうしよう。

ム力つくけど、ここはこいつの話に乗るしかないのか。乗らない

場合は、野垂れ死にコースっぱいしなあ……。こんな訳の分からないことで野垂れ死には嫌だ、うん。

千花は頷くと、カイルに聞く。

「……敬語は使わなくちゃ駄目？」

「まあ、なくてもかまわない。俺も師匠に使ってないしな。なんならカイルと呼び捨てにしてもいい」

「……ええ？」

俺様なのに、カイルと呼び捨てにするのはOKなのか？

千花がまじまじとカイルを見返すと、なぜか彼は頬を染めてそっぽを向いた。

「それでどうなんだ。俺の弟子になるのか、ならないのか？」

「うう、しょうがない、弟子になるよ。……本当にちゃんと帰る方法教えてくれるんでしょうね？」

「しかるべき時が来たらな。まあ、数年先のことだと思うが」

「数年先なんて困るよ！ それじゃ元の世界に戻った時にわたし死んだことになってるかもしれないじゃない」

あれ、行方不明者の死亡確定って何年だっけ。千花は叫びながらもそんな悠長なことを考えていた。

「それはおまえ次第だ。せいぜい頑張ることだな」

「言われなくても頑張るよ」

死亡確定だけは嫌だ。なんとしてもそれまでには家に帰らないと。千花は拳を握って決意を新たに頷くと、カイルに言った。

「じゃあ、嫌だけど、ここにお世話になることにする。すつごく嫌だけど」

しつかりと嫌だけどのところを千花が強調すると、カイルは顔をしかめた。

「おまえの部屋はここだ」

カイルに案内された二階にある部屋は、元の世界の千花の部屋よりも三倍は広かった。

「わあ、可愛い部屋ー」

その部屋の壁には爽やかなグリーン系の壁紙の上に同系色のボーダー壁紙、またその上に控えめに小花を散らした壁紙が貼られていた。

備え付けのアンティークな机と椅子。チェストにベッド。確かに待遇はいいようだ。

「なにか必要なものがあるなら女中のメリサに言つといい。すぐに揃えてやる」

「うん、そのメリサさんて人はどこにいるの？」

千花が聞くと、カイルは部屋にチェストの上に置いてあったベルを取った。

「用があるときはこのベルを鳴らせ。これはおまえの部屋専用のベルだからすぐにこの部屋に来る。試しに鳴らしてみろ」

「うん」

素直にベルを鳴らすと、程なくして四十代くらいの髪をひつつめた女性が部屋のドアをノックして現れた。

「お呼びでしょうか」

「ああメリサ、弟子を取ったから紹介する。ティカ・サトー、歳は……いくつだ」

「十六だよ」

「メリサでございます。以後、よろしくお願いいたします」

「あ、はい。よろしく願います」

メリサは千花に頭を下げると、千花も慌てて彼女に下げ返す。

「十六か、せいぜい十四、五歳だと思っていたが幼く見えるな」

カイルが千花の全身をまじまじと観察するが、千花にしてみれば、幼く見られがちな日本人の大体の年齢を当てる方が驚きだ。

「顔だけ見れば十二くらいだが、おまえ、体つきだけはいいいからないやに長々と見てると思ったら、セクハラかよ！

「……殴つてもいい？」

「殴つてから言うな。さっきの平手といい、凶暴だな、おまえ」
殴られた頭をさすりながらカイルが愚痴る。

「まあ、仲のよろしいことで。師弟と言うより、まるで恋人同士です
ね」

「……そう見えるか？」

「冗談でもやめてください」

まんざらでもなさそうなカイルがちょっと怖い。千花は慌ててメリサに認識を改めてもらった。

「まあ、残念です。カイル様はおもてになるのに恋人はいらっしゃらないので、私たち使用人はやきもきしているのですわ。ティカ様がその気になりましたら、いつでもこのメリサにお申しつけください。精一杯応援させていただきます」

カイル、もてるのか。確かに外見は超絶美形だけど、性格がアレすぎるだろう。

千花は世の中の不条理さを呪いながら、期待に満ちた目で見てくるメリサに全身全霊で否定した。

「……いや、そんな気はまったくありませんからっ！」

「……そうですか。本当に残念ですわ。……それはそうと、ティカ様お召し替えをなされませんか？ そのお洋服はこの気候には少し涼しすぎるかもしれないので」

「確かにちよつと寒いかも」

ぴつたりした半袖Tシャツにふくらはぎ上までのパンツにサンダルという格好なのだが、先程まで汗をかいていたせいもあり、かなり肌寒い。

「それに肌や体の線を少々露出させすぎですわ。カイル様には目の毒です」

「いや、むしろ目の保養だが」

……おまえは黙ってる！ と千花は有無を言わせない笑顔でカイルを黙らせると、メリサに向き直った。

「はい、着替えます。あの、汗をかいてたので、出来ればお風呂に入りたんですけど、いいですか？」

「はい、すぐにご用意できます。こちらへどうぞ」

メリサに案内された浴室はゆったり出来る浴槽やシャワーもあり、使い方は日本にあるものとそう変わらなかった。

うつわー、高そうなお風呂ー。まるでホテルみたい。……さすがにライオンの口からお湯は出てはいないけれど。

千花がいかにも高級そうな金の蛇口やシャワーヘッドを眩しげに見ていると、メリサに着替え一式とタオルを渡された。

「それでは、ごゆっくり」

「はい、どうもありがとうございます」

千花がメリサを見送っていると、約一名、入浴に大変邪魔な者が残っていた。カイルだ。

「カイル、わたし今からお風呂に入るんだけど。とつと出ていくてくれない？」

なんとか笑顔で千花は言うが、その頬はひきつっていた。

「なんだ、せつかく背中を流してやろうかと思ってたのに」

カイルのその言葉に、千花はぞわつと鳥肌を立てる。

せつかく平和的に言ってやったのに、これは体に直接分からせないと駄目なようだ。

「出てけ——っ！」

千花はカイルをボコボコに殴ると、浴室のドアの鍵をしっかりと閉めてから、異世界での初お風呂を堪能した。

03 ガルディア王宮へ

少し冷えてきていた体もすっかりほかほかになって千花は上機嫌で風呂から上がった。

タオルで体を拭くと、たちまち水分が吸収されていていつて千花は驚いた。

試しに洗った髪の毛を拭いてみると、こちらもほとんど乾いてしまった。おまけに髪や肌に必要な水分までは吸収しないらしい。

「すごい、ドライヤーいらないや」

異世界の高性能なタオルにすっかり感心しながら千花はメリサから受け取った着替えを広げてみた。

下着は千花の世界とそう変わらないようだがブラはないらしい。その代わりにキャミが長くなったようなものがあつた。……つまりこれを着るということらしい。ちよつと心細い感じだが、仕方なく千花は下着を身につける。

その上に桃色のドレスのような長いワンピースを着る。太腿までの長さのストッキングを履いた後、ふくらはぎまでの編み上げブーツを履く。

「うわあ、馬子にも衣装かもー」

脱衣所の鏡に全身を映して、千花は前や後ろを確認する。この格好だけで何割り増しか自分が可愛くなったような気がするから不思議だ。

普段あまり女の子らしい装いはしない千花だったが、それでも今の自分の格好にはうきうきした。

「まあ、ティカ様よくお似合いですわ」

ティカが風呂から出るのを待っていたらしいメリサが、千花の姿を見て褒めた。

「あ、どうも。メリサさん、お風呂ありがとうございました」

「いいえ、お入りになりたい時はいつでもお申し付けください。そ

れはそうと、ティカ様がお出になつたら、カイル様が部屋まで来るようにとおっしゃってましたわ」

「分かりました」

メリサに案内されてカイルの部屋に入った千花は、シモンがいるのを見て、そういえばいたんだっけと彼に失礼なことを思った。

「ああ、とてもよく似合っている。これならこのまま王宮に向かつて問題ないか」

「お、王宮ですか？」

いきなり大仰な話題になったので、千花はびつくりした。

「第二王子に俺が弟子を取ったことを報告しなければならぬからな」

こともなげに言うカイルに千花は反論する。

「で、でも、わたし、王子様に会うのに必要な礼儀作法なんて全然知らないよ！？ そんなんで大丈夫なの？」

それどころか、敬語自体できるかどうか怪しいくらいだ。

「その点は全く気にしない人物だから大丈夫だ」

「……そうなの？」

「ああ」

第二王子様とやらはその身分によらず、随分気さくな人物らしい。そう心配することでもない和理解した千花は思わずほっと息をついた。

しかし、王子様に会うなんて大事なのに、簡単に会うと言うなんて、この二人は結構な重要人物なのかもしれない。

「それでは行くか」

カイルはちよつとそこまで、のような感じで言うと、三人は簡単に城の前まで移動した。

目の前にそびえる白い美麗な城に、千花が思わず口をあぐり開けて見とれていると、カイルが彼女の額を指先で小突いた。痛みはなかったが、いきなりだったので思わず千花は仰け反ってしまう。「なにすんのよっ」

「馬鹿みたいに口を開けて上を見るな」

「！ 馬鹿みたいで悪かったわね！」

確かに間抜け面だったろうと想像できるだけに、千花は真っ赤になって怒鳴った。

シモンが城の衛兵に目をやると、彼らは頭を下げ、城の入り口から退いた。

——つわあ、顔パスかあ。

その様子を少々驚いて千花は見ていた。

シモンはカイルにはかなわなくて正直情けないと思っていたが、案外偉い人なのかもしれない。

「……あの、シモンさんでもしかして結構偉い人なんですか？」

恐る恐る千花が上目遣いで聞くと、とんでもない返答がことなげに返ってきた。

「……ああ。一応、この国の魔術師団師団長をしている」

「そ、それって結構な重要人物ってことですか？」

「まあ、一応な。しかし、俺より強大な魔術師が身近にいるから代替わりさせようとしたんだが……、失敗だったようだな」

シモンは深い溜息を付くと、カイルを見た。

「……誰がそんな面倒な役目に付くか。それに俺は一人で行動している方が性に合っている」

カイルがうんざりとした様子でばつさりと切り捨てる。

「しかしだな……、稀代の魔術師であるキース・ルグランの再来と言われるおまえを放置しておくのは国家の損失だぞ。これは殿下も同じご意見だ」

「……ふん、無駄なことを」

千花には理解できない言葉もあったが、シモンは弟子であるカイルを後継者としていようだ。

そうこうしているうちに一つの立派な部屋の前で二人が立ち止まったので、千花も慌てて止まった。ひょっとして、ここが第二王子の部屋だろうか。

「エドアルド殿下に目通りを」

第二王子の名はどうやらエドアルドというらしい。

シモンが近衛と思わしき人物に声をかけると、その彼は「少々お待ちください」と言っただけに伺いに行った。

「今の人って、近衛の人？」

王族の人を守っているならきつとそうだろうと思って、千花は口にする。

「ああ、近衛騎士だ。おまえは初めて見るか」

カイルと小声で話していると、その近衛騎士が戻ってきた。

「殿下がお会いになるそうです。どうぞ中へお入りください」

促されて中に入ると、華美すぎない上品な部屋の中央に、二十代前半と思われる一人の人物が立っていた。

その人物は印象的な藍色の瞳をしていて、長い見事な金髪を緩く三つ編みにして前に垂らしている。美麗で、かつその上品な所作はまさに王子様というしかなかった。

「……まさか、本当に弟子を見つけてくるとはね」

王子はカイルを見て呆れたように溜息を付いた。

「ティカ、殿下に挨拶を」

シモンがそう言ってくるが、千花にはどう言っているのか分からなかった。……ので、自然と無難そうな挨拶になる。

「ち、いえ、ティカ・サトー、十六歳です。よろしくお願いします」
ペコリと千花が頭を下げると、エドアルドが微笑んだ。

「十六歳か、若く見えるね。それに変わった顔立ちだ。どこの国の者だい？」

エドアルドは本当に気さくな性格らしく、得体の知れない千花にも簡単に声をかけてくる。

「え、えーと、日本です」

「ニッポン？」

エドアルドが聞きなれない言葉を聞いたというように、首を傾げる。

「ニッポン、もしくはニホン。またはジャパン」

「ニホン？ ジャパン？ 聞いたことないな」

「それはそうだろうな、この娘は異世界の者だからな」

カイルが王子に対して不遜な口を利くのを千花は他人事ながらも、ついハラハラしながら聞いてしまった。

「カイル、おまえ……。まさか異世界召喚をやったのか」

エドアルドが驚愕に瞳を見開いた。

「異世界探索をしていたら、たまたま俺より魔力の高い娘を見つけたからな。俺の弟子になることを了承させだし、これで文句はないだろう」

「いや、その娘にも家族がいるだろう。すぐ帰してやった方がいいんじゃないか。なんなら、あの話はなかったことにしてもいい」

エドアルドが士官の話を立ち消えにするとまで言ったことに、千花は感動した。

うわあ、なんていい方なんだろう。わたしを家に帰せって言うてくれたよ。鬼畜なカイルとは大違い。

「今更だな。俺はこいつに魔術を教えるつもりでいるし、帰す気は全くない。ティカが帰ることがあるすれば、自力で異世界へ戻る時だけだ」

カイルは感激しているティカの気分を地に墜とすようなことを言った。どこまでも勝手な男である。

「しかし、それでは帰るのに何年もかかるぞ」

「……それはティカの努力次第だな。魔力に関してだけは全く問題ないから、それほどかからないかもしれないが」

カイルが肩を竦めると、エドアルドは千花自身に興味が沸いてきたようだった。

「へえ、そんなに魔力があるのなら、ぜひ見てみたいな。確か魔力を計る魔道具があっただろう」

「ああ」

カイルは水晶を手元に召喚させると、それを千花の両手に乗せた。

「えっ？ えっ？」

訳が分からず千花が慌てていると、カイルが説明した。

「魔力を計る魔道具だ。それに念を集中させる」

「念を集中させるって言われても……」

そんなことをやったことのない千花はうろたえてただ周りを見渡す。三人の男達は千花の動向を見守ったままだ。

「やり方が分からないなら、その水晶をじっと見つめているだけでいい」

ああ、それなら大丈夫だ、と千花はほっと息をつく、水晶に意識を集中させた。

その途端、水晶が虹色に輝きだして千花は思わずそれを取り落としそうになって慌てる。

「えええ、なにこれっ!？」

そしてとうとう虹色の輝きがエドアルドの部屋全体を眩しく照らしたかと思うと、いきなり千花の手元の水晶が跡形もなく消えた。

04 異国の姫君

先程までエドアルドの部屋を眩しく照らしていた光は消え去り、元の静寂な室内に戻っていた。

「き、消えちゃった……」

手元の水晶がなぜか消滅してしまったことで、千花はうろたえる。

「……測定不能か」

カイルが少し考え込むように顎に手を当てる。

「いや、まさかそんな者がいるのか？ それにあんな光の色は初めて見た」

シモンが驚愕を露わにして千花を見る。それに倣うようにエドアルドも興味深そうに彼女を見た。

「これは、それだけ彼女の才能が桁違いだということでもいいのかい、カイル」

「……まあ、そうだな。俺もまさかここまでの魔力の持ち主だとは思わなかったが」

「ええ？ それ始めから分かってたんじゃないの？」

「大体の魔力は予測することは出来るが、正確な魔力の量が分かるわけではないからな」

「……なんかいい加減……」

ぼそつと千花が漏らした一言に、カイルが冷ややかな視線で「なにか言ったか」と返した。

「別にー。……それはそうと、魔術師としてはわたしの魔力は合格ってこと？」

「いや、合格どころか、今すぐにでも魔術師団に入団してもらいたいところだな」

なぜかカイルではなくシモンが目を輝かせて言う。

「はい？ でも、わたしカイルの弟子になるんじゃないんですか？」

「いや、これだけの才能を埋めておくのはもったいない。いずれは

史上初の女性魔術師師団長も夢ではないぞ」

「いや、あの……わたしは家に帰りたいんですけど。そんな役職に就いたら帰るに帰れないじゃないですか」

割と強引なシモンに千花は内心たじたじになる。

第一、そんな人の上につく役目なんて面倒だ。

「ここに永住したらいいじゃないか。そもそも何年も行方不明になっていた人間が元の世界でうまくやっていけるとはあまり思えないが」

「！ 酷いです！ 第一、シモンさんがカイルに弟子を取れって言ったから、こんな訳の分からない状況になったんじゃないですか——っ！」

先行き不安なのは理解していたが、さすがにこれはあんまりだ。思っていないかったところでのシモンの暴言に憤り、千花は瞳に涙を溜めて怒鳴った。

握った両手の拳が怒りのあまりぶるぶると震える。

暴力はいけないと分かっているが、すごく殴りたい。

弟子が弟子なら師匠も師匠だ。

「ティカ、気持ちは分かるけれど落ち着いて」

エドアルドが千花を宥めるように言うが、あまり効果はなかったようだ。

「だって、だって、だって！ 異世界召喚なんてされたおかげでわたしの人生、滅茶苦茶じゃないですか——っ！ シモンさん、そんなこと言うならすぐに家に帰してくださいよ！」

言ってみれば、千花は被害者だ。

間接的ではあるがその加害者のシモンがよりによって、元の世界でうまくやっていけないとは、思っただけでも絶対に言っただけじゃない言葉だ。

「ティカ、うるさい黙れ」

カイルがかつたるそうに手を振ると、千花は途端にしゃべれなくなった。

「……………！」

千花がなにごとか叫ぼうとして口をパクパクさせる。
やがてなにを主張しようと無駄と悟った千花の瞳からぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「ああ、ティカ泣かないで」

エドアルドがティカの頬に流れる涙を指で拭った。

「第二王子、ティカに勝手に触れるな」

カイルがエドアルドから無理矢理千花を抱き抱えるようにして奪う。

「……………へえ」

エドアルドは瞳を見開いた後、面白そうに笑った。カイルは一瞬それを鬱陶しそうにして見たが、すぐにシモンに向き合ってた言った。
「師匠、ティカは俺の弟子だ。それを魔術師団に勝手に入団させることは俺が許さない」

「しかし、飛び抜けた才能があるのに士官させないとは宝の持ち腐れだぞ」

「くどい」

カイルは有無を言わせない口調で、シモンを黙らせる。

「カイルは余程ティカが気に入ってると見えるな。君のそれは独占欲かい？ 確かに彼女は毛色が変わっているが」

エドアルドがそう言うて上から下まで値踏みするように見たので、ティカは落ち着かなかった。

「そうだ、今日の晚餐はこちらで取っていくといい。ティカには今からその支度をしてもらおうか」

「……………晚餐は口実で、ティカに装わせることが目的だろう。晚餐だけならこの格好で問題ないはずだ」

エドアルドの提案に、カイルが不機嫌そうに眉に皺を寄せる。

「まあ、そうだが。わたしもティカがどんな女性なのか興味があるんだよ。……………そうそう、ティカの沈黙魔法はもう解いてくれるかな」

エドアルドは笑って言うて、侍女を呼びだした。

魔法が解除されたことで、ようやく話せるようになった千花はほっと息をつく。

「ちよっと、無闇に人に魔法なんてかけないでよね」

千花がカイルに文句を付けたら、彼は肩を竦めた。

「激昂する人間にはあれくらいがちょうどいい。おまえ、王子に『だつて』と何度も言っていたぞ」

そう言われてみれば、言ったような気がする。

千花はうつつまると、不敬だったかとエドアルドをちらりと窺った。

「わたしなら、全く気にしてないよ、大丈夫」

「……すみません」

エドアルドには幸い笑顔で返されたが、怒りのあまり身分の高い王子にまで八つ当たりしてしまった千花は己の未熟さに身が竦む思っていた。

「お呼びでございますか？」

茶がかった金髪に緑の瞳の落ち着いた感じの侍女が扉を叩いて現れる。

「ああ、セルマ。彼女はティカと言って、今度カイルの弟子になった娘なんだが、彼女に晩餐会の支度をしてほしいんだ。それもとびきりのやつをね」

エドアルドがそう言うと、セルマと呼ばれた侍女は驚いたように瞳を見開いた。

「まあ、カイル様の」

カイルのエドアルドへの口調といい、割と身分の高そうな侍女が見せる敬うような態度といい、カイルはひよっとしたら結構身分が高い人物なのかもしれないな、と千花はぼんやり思った。

「それではティカ様、こちらへ」

「は、はい」

セルマに別室の客間へ案内されて、千花はまず湯殿に連れて行か

れた。

一応王宮に来る前に風呂には入っていたのだが、問答無用で数名の侍女達に服を剥かれた。

「あああああなのっ」

羞恥も手伝って、千花が戸惑いの声を上げる。

「ご心配されなくても、最高のお支度をさせていただきますわ、テイカ様」

いや、そういうことじゃないんですけど……。

侍女達に髪や体を念入りに洗われ、千花は半ば諦めの境地にいた。「それにしても、滑らかできめの細かい肌ですわね。お体も細くていられるのに、出るところは出ておられて素晴らしいですわ」

「はあ……どうも」

侍女達の褒め言葉につい気の抜けたな返事をしてしまう千花だが、その間も侍女達は爪を磨いたりして忙しい。

全身をタオルで拭かれ、ようやく湯殿から出たと思ったら、今度は台に寝かされ、いい匂いのする香油を全身に擦り込まれた。

全身マッサージを受けて千花がウトウトしかけたところに、セルマが声をかけた。

「テイカ様、それではお支度をしますので、ご移動をお願いいたしますわ」

「は、はい」

いけない、いけない。

あまりの気持ちよさに危うく熟睡するところだったよ。

千花は慌てて台から起きあがると、湯上がり用の薄い衣装を着せられて、衣装部屋へと移動させられた。

衣装部屋では侍女の間で、千花には何色が似合うか少し議論になった後、結局爽やかな色合いの淡い緑のドレスが選ばれた。そのドレスは爽やかさとふんわりとした柔らかさが絶妙で、こういう物が全く分らない千花にもかなりの一品だと分かった。

下着や靴はすべて繊細なデザインのものに取り替えられ、侍女達

が千花にそれを着せていく。

あー……、お姫様ってこんな感じなのかな。支度のたびに毎回こんなことあるなんて大変そう。

自分はお姫様でなくてよかった、と安心しながら千花は目の前に置いてある全身を映す鏡をじっと見ていた。

背中の中程までの真っ直ぐな黒髪は丁寧に梳られ、艶やかだ。横の短めの髪を残して、サイドをドレスと同じ色の細いリボンで編み込んで飾り、髪型は完成のようだ。

仕上げに化粧を施された途端、幼い自分の顔が一変に大人っぽくなったので、千花は驚いた。

「まあ、なんてお化粧が映える方なんでしょう。とても美しいですわ」

「これなら、殿下もきつと満足されますわ」

侍女達が褒めるのも満更お世辞ではないようだ。千花は呆然としてその支度の出来映えを見ていた。

鏡の中の千花は、どこから見ても美しい異国の姫君だったのだ。

05 そんなに簡単に言うことなのか

……うわ、化けた……。

姫君そのものの自分に驚きながら、侍女達の技術に千花は素直に感心していた。

「綺麗にしていたいて、ありがとうございます」

ぺこりと侍女達に千花が頭を下げると、彼女達は驚いたようだ。

「ま、まあ、カイル様のお弟子のティカ様がたくし達に頭を下げられることなんてありませんわ。それに、エドアルド殿下のご命令です」

「それでも、ありがとうございます」

千花がもう一度頭を下げると、戸惑っていた侍女達がやがて破顔した。

「ティカ様、ご丁寧にありがとうございます。またぜひともあなた様のお支度を担当させて頂きたいですわ」

「あ、はい。もし次がありましたら、よろしくお願いします」

今回の支度はエドアルドの思いつきで、まあさすがに次はないだろうが。

侍女達に手を取られて、千花はドレスの裾を踏まないように慎重に歩き出す。

客間から出ると、いきなり知らない男性から声をかけられた。

「へえ、君がカイルの弟子か。どこの姫君かと思った」

歳は、千花よりも少し年上くらい。十七、八くらいだろうか。エドアルドと同じ色彩で顔も似通っている。

「まあ、レイナルド殿下。ティカ様をご覧になられにいらしたのですか？」

……殿下ということは、この人も王子様なんだろうか？ エドアルド殿下に似ているし。

熱心に見つめてくるレイナルドに戸惑いながら、千花は思う。

「まあね。あのカイルもさすがにとつとつ士官せざるを得ないと思つてたけど、これは予想外だったな。……とても綺麗だけど、君はひよつとして、カイルの恋人？」

「と、とんでもない！」

あんな鬼畜魔術師の恋人と誤解されるなんてショックだ。

千花が慌てて首を振って否定する。すると、レイナルドはなぜかほつとしたように息をついた。

「あ、違うんだ。よかった」

……なにがよかったんだろう？

千花が首を捻っていると、レイナルドが千花の傍に寄ってきた。侍女達は遠慮しているのか声をかけてこない。

「僕はレイナルド、この国の第三王子だ。君の名はなんて言つ の？」

千花の予想通り、目の前の青年は王子だったようだ。千花は城に来る前に教えてもらった略式の礼を取るべく、ドレスを両手で摘んで答えた。

「ティカ・サトーです、殿下」

「ティカか、可愛い名前だね」

「あ、ありがとうございます」

身分の高い王子にかなり気さくに話しかけられて、若干千花は腰が引けた状態になる。……それにさっきからなにやら熱っぽい視線を受けているようで、落ち着かない。

「殿下、ティカ様はエドアルド殿下に晩餐のご招待を受けておられるのです」

「そうなんだ。じゃあ、僕も一緒に出ようかな。一人くらい増えても別に構わないだろう？」

「はい。エドアルド殿下にお伝えして、そのように手配させて頂きますわ」

セルマが微笑んで応対する。どうやらレイナルドが晩餐に参加するのは、決定事項のようだった。

「お邪魔するよ、アルド兄さん」

「なんだ、レイド。ティカと一緒に来たのか」

ティカ達を引き連れて、レイナルドが先にエドアルドの部屋に入ると、意外そうにエドアルドが眉を上げた。

「カイルが弟子を取ったっていうから興味があつてね。……そしたらとても綺麗な娘じゃないか」

レイナルドに促されてティカがエドアルドの部屋に入ると、彼は驚いたように瞠目した。

「これは……、見えたな。ティカ、とても綺麗だ」

「……驚いたな。どこの姫君かと思った」

シモンも千花の変わりように驚いたようで、まじまじと観察してくる。

二人に賞賛されたことで、千花はさつきシモンに憤っていたのも忘れ、少々舞い上がってしまう。

「そ、そんなこと……」

恥ずかしそうに千花は頬を両手で包むと、赤い顔を俯かせた。

「……童顔も化粧一つでこれだけ変わるのか」

カイルが舞い上がる千花の気分を一気につき落とすようなことを言った。

「童顔で悪かったわねっ」

思わず千花はカイルをキツと睨む。

二人のように褒めるとは言わないが、少し黙っていてほしかった。

「童顔？ ティカはとても美人だけど？」

不思議そうにレイナルドがカイルに目をやる。

「第三王子は化粧に誤魔化されているのかもしれないが、ティカの見目は十二歳くらいだぞ」

「……そうなんだ？」

いくぶんがっかりしたようにレイナルドがティカを見る。彼はこ

れがティカの普段の顔だと思いこんでいたらしい。仕方なく彼女は頷いた。

「わたしの本当の年齢は十六ですけど。わたしの国の人は他の国の人から見て、総じて若く見られるみたいですね」

「それでも、ティカ様のお肌やお体は素晴らしかったですわ。十二歳ではこうは参りません。ティカ様のお顔も、いずれ今のように入っぱく花開く時が参りますわ」

「へえ、そうなんだ」

セルマのセクハラまがいの言葉に、男達が大げさなくらい反応する。じろじろと皆に体を観察され、ティカは思わず羞恥から叫び出しそうになった。

「確かに体つきはいいね」

エドアルドが世の中の乙女王子様像を壊すようなことを言う。

「うん、これなら多少童顔でもいいか」

レイナルドが頷きながらなにごとか納得している。

「ああ、そういえば、手足は細いのには胸はあったな」

最初にあった時の千花の格好を思い出しているらしいシモンが言った。どこのセクハラ親父だと思いつながら、千花はシモンを睨みつける。

「……ティカの体をじろじろ見るな」

カイルがかなり不機嫌そうに言ったが、千花はここに来る前に、彼も千花の体をしっかりと観察していたことをもちろん忘れてはいなかった。

「カイルだって、屋敷でじろじろ見てたじゃない」

「俺はいいんだ」

「よくないでしょ、そういうのってセクハラって言うんだからね」千花がむっとカイルを見上げながら言うと、彼は眉間に皺を寄せた。……どうやら不満らしい。

「カイル、いくらティカが魅力的でも、弟子に手を出さないでね」レイナルドが釘を差すと、エドアルドもなぜか楽しそうに言った。

「そう考えると、訓練の時とか危険だね。ティカには師団舎まで来てもらって訓練した方がよさそうだな」

「それはよいお考えですね、殿下」

未だ千花の入団を諦めていないらしいシモンが嬉しそうにそれを受けて言った。

「おい……」

話が妙な方向に向かって、カイルの機嫌もどんどん悪くなっている。

「じゃあ、ティカには訓練の際には城まで来てもらおうか。……それでいいね、カイル」

「……仕方ない。俺ももちろん同行する」

有無を言わず決定するエドアルドの言葉に、本当に嫌そうにカイルが頷いた。

「ついでに他の者にも指導してくれると嬉しいな。無理にとは言わないけれど」

「……無理もなにも、始めからそのつもりでいるんだろうが」

カイルが苦虫を噛みつぶしたような顔で呻くように言う。

俺様な彼がやりこめられるのは千花にはちよつと小気味よかった。

……エドアルドは人当たりが良さそうに見えるが、ひよつとしたら結構な狸なのかも知れない。

「皆様、お食事の準備が整いましたわ。レイナルド様もお越しくださいませ」

話が一端落ち着いたところで、セルマが別室の客間に皆を案内する。

「ティカ、座って」

レイナルドが率先して千花のために椅子を引いた。

「あ、はい。ありがとうございます」

王子に椅子を引いてもらって大丈夫なんだろうかと一瞬千花は不安になったが、彼に甘えて、結局早々に着席した。

「レイドは随分とティカがお気に入りだね」

エドアルドが千花の隣に着席したレイナルドに楽しそうに言う。

「うん、まあ。カイルが弟子を取ったっていうから興味本位で見に行っただけ、ティカ綺麗だし、仕草とか可愛いし」

そこまで褒められると、千花はさすがに真っ赤にならざるを得ない。

「そ、そんなこと……」

「あ、赤くなった。可愛いなあ」

にこにこ嬉しそうにレイナルドが笑う。少し離れた席にいるカイルはそれに反比例してものすごく不機嫌そうだ。

「ティカ、僕、君に一目惚れしたみたいなんだ。魔術師を目指すのもいいけど、もし君さえよかったら僕の妃にならない？」

レイナルドがもの凄く大事なことをちよつとそこまで買い物に行ってくるのに気軽に言ってくる。

「……はい？」

思わず千花の目が点になったが、それは誰にも責められないだろう。

06 稀少な存在

「第三王子、なにを言っている。ティカは俺の弟子だぞ。それを無視して勝手に話を進めるな」

カイルが不愉快そうに言ったことで、千花は一瞬真っ白になった意識を取り戻した。問題のレイナルドは、カイルに対して「ちょっと黙っててくれるかな」などと言っている。

「申し訳ありません。それは無理です」

千花は慌ててレイナルドに答えたが、予想しない返事が返ってきた。

「どうして？ 君は僕が嫌い？」

「どうしてって……、殿下とはほんの少し前にお会いしたばかりじゃないですか。好きも嫌いもありません。それにこんな得体の知れない女を妃になんておかしいです」

自分を卑下したくはないが、この馬の骨とも知れない女を妃にするなんてどう考えてもおかしい。

それをこうも簡単に言うのは、もしかしたらこの王子にはすでに何人か妃がいるのかもしれない。

「得体は知れなくはないだろう？ 当代一の魔術師のカイルの弟子だし」

千花がカイルの弟子になった経緯を知らないレイナルドは当然のように言ってくる。

「……わたしは異世界の日本という国の出身です。それに庶民ですし、殿下に釣りあうとは思えません」

「……異世界？」

レイナルドが千花の言葉に驚いたように聞き返す。

「はい、わたしは異世界の人間です。ただ、わたしには魔力が並外れてあつたらしくて、カイルにこの世界に召喚されたんです」

「ティカが異世界人……」

呆然としたようにレイナルドがつぶやく。

千花はこれで諦めてくれるかなと心の中でほっとする。

いきなり王子妃になってくれなんて、いくらなんでも身に余りすぎる。

「それはすごいね！　カイルよくやったよ！」

「ええっ？」

ほっとしたのも束の間、レイナルドが両手を握ってきたので千花はびっくりする。

すごいとはかく、よくやったとは何事！？

「見たことのない顔立ちだから、他の大陸出身かと思ったら、まさか異世界から来たなんて驚いた。異世界の人間なんて、初めて見たよ」

それはそうだろう。

そんな機会がやたらあつたら困る。

「……そんなパンダかなにかを見るような目で見ないでください」
「パンダ？」

レイナルドに問い返されて、ああ、この世界にはいないのかと千花は理解する。

「わたしの世界にいる珍獣です」

言いながら、わたしはあんなに可愛くはないけどね、と千花は内心で苦笑した。

「珍獣なんてとんでもない。確かに君の存在は稀少だけど、こんなに綺麗なのに」

「ですから、それは化粧のおかげです。素顔を見たらきつとがっかりなされますよ」

「ティカ、そう卑下することもないだろう。君の顔は歳の割に幼いけれど、とても可愛いよ」

「第二王子、せっかくティカが断っているのに余計なことを言うな」
フォローするように千花を褒めたエドアルドに対して不遜にカイルが言う。

「しかしね、ティカは自己評価が低すぎだよ。彼女はそのままでも充分可愛いし、庶民というが、それなりに教養もあるようだしね」

「あ、ありがとうございます」

エドアルドの褒め言葉に千花が赤くなるのをレイナルドが面白くなさそうに見た。

「アルド兄さん、まさかティカに気があるわけじゃないよね？ 随分彼女に好意的みたいだけど」

「さあ、どうだろうね。だけど、別に嫌いになる要素はないだろう？ 装ったティカはとても美しいし、そのままの彼女もとても興味深い女性だよ」

「……ふうん、否定はしないわけだ？」

レイナルドがエドアルドを挑戦的に睨む。

自分のせいでなんだか険悪な雰囲気になりそうだったので、千花は慌てて口を開いた。

「あ、あのっ、エドアルド殿下、冗談はおやめください。今すぐ否定して——」

「ティカ、わたしも君に興味がある。いろいろとね」

エドアルドはそう言ったが、千花は彼がそう言うのは恋愛感情以外の理由からとは思えなかった。

それなのに、レイナルドをわざと煽るようなことを言うなんて、なにを考えているんだろうか。身分上失礼だとは思いながらも、千花は少しむっとしてしまう。

「……それは、わたしが異世界から来たからですか？ ああ、並外れて魔力が大きいことも関係ありますか？ もしかしたら、そのことでわたしに利用価値がありますか？」

「おいおい、ティカ。殿下に対して失礼だぞ」

それまで傍観していたシモンが慌てたように言ったが、千花は黙ってエドアルドをじっと見ていた。

「……これは手厳しいね」

エドアルドは驚いたように瞳を見開くと、次には苦笑した。

「本当に君は興味深い」

エドアルドが一瞬だけ熱い視線を送ってきて千花は少しうろたえる。それを見逃さなかったレイナルドがエドアルドに宣言した。

「いくらアルド兄さんでも、ティカは渡さないよ。兄さんに妃候補はいくらでもいるだろう？」

「あのっ、レイナルド殿下、誤解です。エドアルド殿下はわたしのことはなんとも思っておられませんから」

「ティカ、わたしは君のことを興味深いと言っているだろう？ それがなぜなんとも思っていないことになるんだい？」

慌てて取り繕うとする千花に、エドアルドは楽しげに言う。

「エ、エドアルド殿下、で、ですから、おふざけはやめてください」これはさっきの反抗的な態度への反撃だろうか。

もはや面白がっていると思えないエドアルドに、千花は狼狽えまくる。

「……王子達、いい加減に晚餐に入りたいんだが。食事を取りながらでも会話はできるだろう」

不機嫌そうにカイルが会話に割り込むと、エドアルドがくすりと笑った。

「ああ、そうだね。せっかくの食事が冷める」

とりあえず自分を取り巻く妙な雰囲気は少しだけ和らいだので、千花はほっとする。

直球なレイナルドはともかくとして、エドアルドの思わせぶりな態度は心臓に悪すぎる。

「ティカ、この食事は大丈夫そうかい？」

エドアルドにそう言われて、千花は大皿に盛られた料理を見る。どうやらここでの食事は大皿から自分の皿に取る形式のようだ。

「はい、大丈夫そうです」

料理もそんなに元の世界と変わりはないさそうだ。食事のマナーもよく分らない千花は少しだけほっとする。

「ティカ、取ってあげるよ」

レイナルドがかいがいしく千花の世話を焼く。

「あ、ありがとうございます」

レイナルドは気を利かせたのか全部の大皿から料理を取ってくれたので、千花は食べきれるか不安だったが、味も元の世界のものとそう変わりはなく、おいしく食べられた。異世界でも料理がそんなに変わらないなんて不思議なものだ。

「ティカ、もつと食べる？」

「もう充分です。というか、お腹いっぱいです。ごちそうさまでした」

「もう？ 小食だなあ」

そう言うレイナルドは見ていて気持ちよいくらい食べている。

他の男性陣も結構食べていて、確かにこの中では小食になるかもと千花は食後のお茶を飲みながら苦笑した。

「それはそうと、ティカ。妃の件、考えとして。僕は君がその気になるまで待つから」

一応断ったはずだが、レイナルドには千花を諦める気は全くないようだ。

千花はレイナルドを見上げると、先程の自分の考えを彼にぶつけてみた。

「……殿下には、他にそういう方いらっしゃるんですか？」

「そういう方って、妃のこと？ いないよ。僕が妃にしたいと思っただのは君だけだ」

あまりにも簡単に言うから、てっきり他にも妃がいるのかと思ったら、レイナルドは結構身持ちが堅いらしい。

「そうなんですか？ わたしはてっきり何人も妃がいらっしゃるのかと思ってました」

「酷いな、僕はそんな無節操な男じゃないよ。妃は一人だけだと決めるし」

「す、すみません。軽率でした」

いかにも心外なことを言われたとばかりに憤慨するレイナルドに

対して千花が小さくなる。

けれど、その一人だけに選ばれてしまった千花は、事の大きさに気づいて慌てて言った。

「で、でも、わたしはいずれ家に帰るんです。ですから殿下のプロポーズはお受けできません。召喚魔法を覚えなければならぬので、何年もかかるかもしれませんけど――」

「駄目だよ。君は帰さない」

千花の言葉を遮ってレイナルドが真剣な顔で言うてくる。千花はその様子になんとなく不安を覚えて彼を呼んだ。

「……殿下？」

「帰るなんて駄目だ。カイル、ティカに召喚魔法を教えるな」

思いもかけず強権を振りかざすレイナルドに、千花は震えた。

もし、彼に本当にこのまま帰れないようにされてしまったらどうしよう――。

「レイド、気持ちは分かるけど、それはティカには酷だよ」

エドアルドが諭したことで、レイナルドがはつとしたように千花を見た。千花は瞳に涙を溜めながら小さく震えていた。

「……レイナルド殿下、わたしは帰りたいのに酷いです」

「ティカ、ごめん。君を傷つけるつもりはないんだ。僕は君が好きで、だから……っ」

レイナルドの腕が千花を抱きしめようと動くが、それはなぜか途中で止まった。

「第三王子、食事の席でティカになにをする気だ。俺の弟子を勝手にどうこうするのは、いくら王子でも許さない」

どうやらカイルがレイナルドの動きを止めたようだ。

「分かった。今はなにもしないから、カイル、拘束魔法を今すぐ解け」

レイナルドが顔をしかめて命ずると、カイルはすぐに魔法を解いた。

気さくだけれど、レイナルドのこういうところはいかにも王子然としていて千花は戸惑ってしまう。

そのレイナルドは物事を見極めるようにカイルをじっと見つめてから言った。

「……カイル、君も弟子を心配するにとしては態度がおかしいな。それは君もティカのことが好きだからなんじゃないか」

07 暴拳への仕返し

「……邪推するな、王子。ティカの強大な魔力には興味あるが、それ以外の感情は俺にはない」

「そうです！ そんなことありえませんか！」

鬱陶しそうに否定するカイルの言葉に千花は頷くと、拳を握って力説する。

「カイル、行く当てのないわたしに、弟子にならない場合は生活の保障は一切ないなんて言うんですよ？ 好きな娘にそんなこと言う人なんていますか？ いないですよ？」

ここぞとばかりに千花は王子二人に同意を求める。

「なんだって？ ティカにそんなことを言ったのか、カイル」

レイナルドが怒りと呆れの間顔のような顔になって、カイルを問いつめる。

「それは……」

カイルは気まずそうに視線を彷徨わせた。

あー、俺様のカイルのこんなうろたえる姿が見れるなんて最高だわ！

千花は嬉しさのあまり、事の顛末を王子達にしっかりと伝えておくことにした。

「ええ、はつきり言いました！ その時のシモンさんも酷いんですよ。カイルに弟子をとれって言ったのはシモンさんなのに、どうにかしてくださいって頼んだら、カイルにどうにかされるのが怖くてわたしを保護できないって言ったんですよ。信じられないですよ！」

矛先がカイルから急に自分に変わったシモンがぎょっとしたように千花を見る。

「ティ、ティカ……」

「……シモン、君はカイルの師匠だろう。どうやら初めから諦めて

いたようだが、なんとか彼の手綱を取ることもできたんじゃないか？ 相談してくれば、わたしにも責任の一端はあるし、こちらでティカを保護したのに」

エドアルドが情けないとばかりに溜息をつく。叱責を受けている当のシモンは冷や汗をかいている。

ふふふ、ざまみろ。二人とも、わたしの苦悩を少しでも思い知れ。元の世界に何年も戻れないことになって、すっかりやさぐれていた千花は、心の中で暗い笑みを漏らしていた。

だが、その心情とは逆に、千花の瞳には大粒の涙が溜まり、その姿は哀れではあったが可憐で、王子達の同情を一心に集めていた。

「弟子の件を了承してなければ、今頃わたし、路頭に迷ってたかもこのままじゃ野垂れ死ぬかとも思って嫌々ながら弟子の件を了承したんですよ。そんな非道なことをするカイルがわたしのことを好きなのけないじゃないですか」

「そ、それはそうかも……。好きな相手にそんなことはしないよな」

「そうです！ ありえないですが、もし仮にそうだとしても、こんな顔だけ鬼畜魔術師なんて絶対にお断りです」

「おい、ティカ……」

千花の暴言にカイルが周りの空気をビキビキと凍らせているが、知ったことじゃない。

初めて会ったときはその超絶美形ぶりにすっかり見とれてしまったが、今となつてはそれは人生最大の汚点だ。

「二人とも否定はしないところを見ると、事実なんだな。……ティカ、つらい思いをさせて悪かったね」

エドアルドが溜息をつく、千花に頭を下げてくる。

「えっ、そんな、エドアルド殿下、そんなことされないでくださいっ」

千花はエドアルドの行動に、びっくりして思わずうろたえた。

「しかし、仕官できないなら魔力の高い弟子を取れと最初に言った

のはわたしだ。シモンはそれをカイルに伝えたにすぎない。……もちろん、その経過には問題はあったけれどもね」

エドアルドは一見庇っているようだが、はっきりシモンを責めていた。シモンが更に小さくなる。

それでも、自分の責任はきちんと認めて身分が高い彼が庶民の千花に頭を下げて謝罪までしてくる姿に、千花は感動した。

さっき彼に反抗的な態度を取ってしまったのは悪かったかもしれない。

「エドアルド殿下、頭をお上げください。今回のことは殿下には予測されないことだったのでしょうか？　わたしは殿下に怒ることなんてできません」

「しかし、それではわたしが納得しないよ。……なんだったら君を王宮で保護して、ああ、もちろん待遇も出来るだけのことをするが、どうする？」

「それはいいね、アルド兄さん！」

嬉々としてレイナルドがエドアルドの案に賛成する。

「え……、でも悪いです」

王宮での生活なんて堅苦しいだろうし、それにうまく溶けこむ自信もない。

狼狽える千花に、エドアルドは諭すように言う。

「……ティカ、君にはこの世界のことを早急に知ってもらう必要がある。それには、ここにいた方が手つとり早いと思うよ。教師も揃っているしね」

「でも……、せっかくカイルの屋敷の人を紹介してもらったのに。

あ、それと自転車！　たまには乗らないと壊れちゃうかも」

乗らないことで滅多に壊れはしないとは思うが、たまには整備くらしいしないと。唯一元の世界から一緒に来たものだ。あれが壊れたら、ちよつとどころか、かなり寂しい。

「……自転車？」

二人の王子が不思議そうに聞いてくる。

「わたしが召喚された時に乗っていた乗り物です。出来たら、それで街も見えて回れたかったんですが」

「へえ、それどんなの？」

レイナルドが興味深そうに言うと、カイルが屋敷に置いてあった自転車を召喚してきた。

「へえ、これが自転車か」

「かなり精巧な作りだね。どんな構造か是非調べてみたいものだが」
「壊さないでください！」

エドアルドの言葉にぎょっとして千花は思わず叫ぶ。

「壊さないよ、大丈夫。構造を調べるだけだ」

王子二人がどうやって乗るのか聞いてきたので、千花は簡単に説明する。

「……そうか。しかし、先程来ていた服ならともかく、これにドレスで乗るのは無理じゃないかな」

「え、わたし、ドレス着るんですか？」

「君はわたしの客人扱いにする。普段着るのももちろんドレスだ。今君が着ているようなね」

「えええ、そこまでの待遇にさせていただかなくても結構ですっ」

まさかそんなお姫様待遇なんて思っていなかった千花は、思わず飛び上がって驚いてしまう。

「駄目だよ、君は異世界から来ているというだけでも結構な重要人物なんだよ。……そうだな、週末だけでもカイルの屋敷に行けるようにしようか。君の警護にはカイルがいるから、街に下りても大丈夫だろう」

「あ、ありがとうございます」

とりあえず、先程言った希望は聞いてもらえた千花はほっとする。城ではお姫様待遇というのがかなり気になったけれど。

「余計なことだ。ティカは俺の屋敷で面倒を見る」

「カイル、これはわたしからの命令だ。週末にティカを君の屋敷にやるのも、こちらとしてはかなりの譲歩なんだよ。言いたいことは

山ほどあるだろうが、文句を言わずに素直に聞いてほしいね」

穏やかだけれど有無を言わせないエドアルドの口調に、カイルが口を噤む。

「……分かった」

やがて、不承不承というようにカイルが頷いた。

さすがに不遜なカイルでも、王子の命令には逆らえないらしい。

だったら、もう少し口調にも気を使ってほしいと他人のことながら千花は気になってしまう。

「そしたら、君の部屋を用意しなければいけないね。……セルマ、すぐ手配出来るかな」

「はい、先程使用したご婦人用の客間が空いておりますので、すぐにティカ様にいらしていただいても大丈夫でございます」

「そうか。では、ティカにはそこを使ってもらう。……ティカもそれでいいね？」

エドアルドに一応確認されたが、すでにこれは決定事項のようだ。
「はい」

千花が頷くと、レイナルドが嬉しそうに声をかけてくる。

「ティカ、これで毎日君に会えるね」

「はあ……」

千花は突然の事態に少し呆然としてしまつて、思わず氣のない返事をしてしまった。

「週末は城にはいないかな」

「お忍びで行くから問題ないよ」

この王子、ひょっとして街まで付いてくる気だろうか。

千花は少し驚いてレイナルドをまじまじと見てしまう。

「警護が面倒だから、第三王子は来るな」

カイルが冷たく言うが、レイナルドに堪えた様子はない。

「自分の身は一応自分で守る気にいるけどね。それにしても、カイルは当代一の魔術師と言われているのに、ずいぶん自信がないんだな」

ああああ、そんな喧嘩を売るようなことを！

案の定むつとするカイルと、それを挑戦的に見つめるレイナルドの間で火花が散った気がして、千花ははらはらする。

「レイド、王子の君がお忍びでそんなに街に下りるのは問題だよ。程々にしないと」

「……分かったよ」

エドアルドに宥められて、レイナルドは渋々頷いた。

しかし、これで城とカイルの屋敷での生活を余儀なくされた千花はそつと溜息を付く。

……無理矢理城に滞在させることを決めさせたけど、エドアルド殿下も強硬にはカイルにわたしを家に帰せとは言わないんだな。

「ティカ、どうした？ 不安かい？」

溜息を付いたのをエドアルドがめざとく見ていたらしく、千花に聞いてくる。

「いえ、わたしを家に帰してくれれば、問題は解決するのになと思っただけです」

「ティカ」

そう言った途端にレイナルドが悲痛そうに見てきたので、ティカは内心うろたえる。

そんな捨てられた子犬のような目で見ないでほしい。

「俺はおまえを帰す気はないぞ」

カイルがこう言ってくるのは想定内だった。けれど、エドアルドが次に言った言葉は薄々感じてはいたが衝撃的で、千花は瞠目する。「……まあ、唯一異世界召喚が出来るカイルがこう言っている以上無理だと思うね。それに君に恨まれるのを覚悟で言うが、わたしもまた君を帰したくないと思っっているんだよ」

08 微妙なお姫様待遇

「アルド兄さん、やっぱりそうなんだ？ でもティカだけは譲れないよ」

レイナルドがむっとしてエドアルドを睨んだ。

「譲るも、譲らないも、選ぶのはティカだろう？」

エドアルドのおふざけは未だ続行中らしい。

千花は頭が痛くなってきた気がして、こめかみを押さえる。

「あの、お言葉ですが、わたしは誰も選びませんよ。わたしは家に帰るんです」

「ティカ……」

きつぱりと千花が宣言すると、レイナルドは情けない顔になる。

「それから、エドアルド殿下、そうやってからかうのはおやめください。余りすぎますと、ご兄弟の仲が悪くなっても知りませんよ」

「それは困るね」

千花の忠言にも堪えた風はなく、エドアルドは肩をすくめた。

「でも、君の存在は稀少でおまけに魅力的だし、帰したくないと思ってもちつとも不思議ではないだろう？」

「おい、第二王子、ティカを口説くのはやめろ」

カイルが間に入ってくるけど、口説いてるというのはちょっと違うと思うなあ、と千花は考える。

「……言っておきますが、わたしに異世界の知識を期待しても無駄ですよ。一応九年の義務教育は終了しましたが、専門的な知識を持っているわけでもないですし」

「この国にも五年の教育の義務はあるけど、九年は長いね」

「そうですね？ みんなその上の学校に行く人がほとんどですが。わたしも高校に通って一年目でしたが、このままこの世界に滞在すると、退学することになりそうですね。出来れば大学まで出たかったです。義務教育までの中卒じゃ就職にも相当不利ですし」

まあ、元の世界に帰った後で、大検を受ければいいのだろうが、それでも戻ったら戻ったで前途多難そうだ。

「それに、今は大学を出ても就職が大変らしいですし、本当にこの状況は困りますよ」

千花が思わず溜息を付いていると、シモンが我が意を得たりとばかりに嬉しそうに言ってきた。

「だから、魔術師団に入ればいいじゃないか。そうすれば、少なくとも生活に困ることはないぞ」

「絶、対、に、おことわりです」

千花はわざと強調して言ってる。まだ、この人は諦めてないのかと、千花は冷たい目でシモンを見る。

「僕の妃になれば、そんな心配することないのに」

レイナルドが期待を込めて見つめてくるが、そういうんじゃないんだよなあ、と千花は心の中で溜息を付く。

「……そういう問題じゃないんです。わたしが生きる場所はその世界なんです。それにわたしの国では、この歳で結婚するには親の許可が必要ですから。……第一、結婚するなら二十代半ばくらいでがわたしとしては理想なんですが」

「女でそれでは行き遅れだぞ」

呆れたようにカイルが言ってくる。

そうか、この国では結婚適齢期はもつと早いのかも知れない。

「そうなの？ わたしの国では普通に結婚しない人も増えてるけど。経済的な理由もあるし、他人と生活する必要がある人いない人もいるみたい」

「……そうなんだ。随分とティカの国は変わってるね。これは、妃の件は長期戦でいかないと無理そうだなあ」

カイルへの説明を聞いていたレイナルドが溜息を付く。

「まあ、高校のこと問題なんですが、一番の問題は、あまり長くこの世界に滞在することになると、行方不明者として、元の世界で死んだことになってしまうことですね。まあ、戻りさえすれば、そ

れも取り消されはするでしょうけれど、下手したら、葬式とか挙げられたり、まだうちには墓はないので、そのためにわざわざ墓を建立されたりするでしょうね。帰った時に、墓誌にわたしの名前が刻まれたりしてたらものすごく微妙ですよ」

千花がこれからの厳しい先行きを想像して、難しい顔で言う。

「……墓誌？」

一同が不思議そうに千花に聞いてくる。

「日本は国土が狭いので、墓地の土地代も馬鹿にならないんです。だから、以前は個人で墓を建てたりしてたんですけど、今は家族単位で立てる人が多いんです。だから今は墓標とは別に、墓誌に亡くなった人の氏名やら没年月日を彫ったりするんです」

「へえー……、そうなんだ。王家では個人で墓標を立てるけどね」

千花の言葉を興味深そうに聞いていたレイナルドが言う。

「……そもそも一般庶民と王家の間では身分が違いすぎるのだから、比べるのが間違いだ。王家では遺体安置用の施設もあるだろうし。」

「つかぬことを聞きますが、レイナルド殿下、死んでないのに、墓標にご自分の名前が刻まれていたらどんな気分がしますか？」

「え……、それは、嫌な気分かな。勝手に殺すなって憤るかもしれない」

「そうですよね。……わたしも今まさにそんな気分です」

千花がそう言うと、一同は一斉に微妙な顔になった。

もしかしたら、自分がそうされた時のことを想像したのかもしれない。

「とにかく、わたしは早急に帰るつもりです。出来たら、三年くらいで。仕方ないので、もちろん死にものぐるいで魔術を教わる気ですが」

「ティカも結構意固地だなあ。ここにいたら、生活の心配もないのに」

レイナルドが帰るなど言外に言って、千花を見る。

「それはそうですが、向こうにはわたしがいなくなったら心配する親とか友人がいるんです。ここにくる前にも、買い物に行ってくるって言って、出ていったきりになってるし。きっと今頃うちの家族、心配してますよ。そんな人達を残して、のほほんと生活するなんてわたしには出来ませんよ」

「まじめだよねえ」

どう説得しても、家に帰ると主張する千花にエドアルドが苦笑する。

「そういえば、ティカは向こうで大学に行きたいと行っていたが、普通に通っていたら何年学校に通うことになるんだい」

「えーと、高校三年、大学四年で、全部で十六年ですね。その上の大学院とかもありますが、さすがにそこまでは行くつもりはありません」

「それにしても、ティカの国の教育体系はすごいね。もう少しっつこんで聞きたいくらいだ」

「……わたしは専門的なことは分からないと、申し上げたはずですが。わたしに聞かれても役に立ちそうなことはありませんよ」

「いや、それは話を聞いてからこちらで判断するよ。ティカがなんとも思っていないことが、こちらにはとんでもない情報と言ったこともありえるしね」

「っ、疲れた……」

あれからエドアルドに、教育のことやら、日本の政治のことやら、世界情勢などをかなりつつこまれて聞かれ、千花はすっかりしどろもどろになって、結局最後には「わたしはごく一般的な女子高生なので分かりません!」と言って部屋から飛び出してしまった。

セルマが慌てて千花の後を追って、彼女の部屋まで案内してくれた。

もう疲れたので寝ます、とセルマに言うと、彼女は納得したように頷き、千花の化粧を落としてから、いかにも上等そうな絹の寝間着を着せた。

千花は初めて見る天蓋付きのふかふかのベッドの上で、しばらく飛び跳ねてはしゃいでいたが、やがてそれにも飽きて、シーツにくるまった。

「明日、ティカ様付きの侍女を紹介いたしますね」

セルマは地位が高そうと思ったら、侍女長だった。なので結構忙しいらしく、新しく二名の侍女がティカに付くことになったらしい。そんなに人数はいらない、と千花は断ったが、もうエドアルド殿下が決めたことですからと、あっさりと断られてしまった。

あー、これもお姫様待遇かあ。

こんな小娘一人に、そんなにいらなと思うんだけどな。

そうこうするうちに、セルマは部屋を退出して、千花は一人ぽつんと残された。

あー、無断外泊かあ。怒られるかな、これ。

ケータイも持たずにこの世界に来たことはまずかったかなと一瞬思ったが、どう考えても電波が繋がるとは思えない。

いつ帰れるのかな、わたし。

千花は、ふとそう思うと、自然と涙が溢れてきた。

いろいろありすぎてそんなに泣く暇はなかったが、一人になると、やはり家族や友人のことが思い起こされて、千花は涙を流した。

帰りたい、帰りたいよ――。

千花を召喚して帰さないカイル、魔術師団へ入団するように薦めるシモン、カイルに召喚魔法を教えるなというレイナルド、元の世界に帰したくないというエドアルド、みんな酷いと思う。

保護してもらったことは感謝はしているが、彼らに対してドス黒

い思いがないと言えはやはり嘘になる。

千花はその感情を追い出すように頭を振ると、シーツを引き被ってかなり長い時間泣いていた。

09 異世界二日目

異世界二日目の朝。

……体がだるい。それになんだか熱っぽい気がする。

昨晚遅くまで泣きはらしていた千花は、寝返りを打ちながら思う。
「ティカ様、おはようございます」

「よくお眠りになりましたか？」

千花がだるくてベッドに横になったままでいると、寝室に新しい侍女と思われる二人の女性がノックして入ってきた。

日本人よりも濃い黒髪黒目を持つ女性と、栗色の髪に濃い青色の瞳を持つ女性。二人とも見たところ二十歳そこそこらしかった。

「あ……、おはようございます」

千花は慌てて起きようとして、くらりと目眩を起こし、再びベッドに沈んでしまった。

「……ティカ様？」

二人が慌てたように千花の傍に駆け寄った。

「まあっ、ティカ様、お熱がありますわ」

栗色の髪の侍女が千花の額に手を置き、驚いたように言った。

「お疲れが出られたのでしょうか。……ティカ様、食欲はございますか？」

黒髪の侍女が聞いてきた言葉に、千花は首を横に振った。それだけで頭がクラクラする。

「……あまりないです」

とにかくだるくて、食欲は感じない。

「医師をすぐに寄越しますわ。エイミ、ハロルド様をお呼びして」

「ええ、ディアナ」

どうやら黒髪の侍女がエイミ、栗色の髪の侍女がディアナという

らしい。

しばらくして五十代くらいの医師と思わしき人物が訪ねてきた。

「ティカ様、お加減はどんな感じですか」

「……とにかくだるいです。あと少し頭が痛いかも」

「ふむ」

ハロルドと侍女達が言っていた人物は少し考える素振りを見せると、千花の口を開けさせて喉を見た。それから彼は体温計に似たものを出してきた。

「お熱を計って頂いてもよろしいですか」

……異世界でも体温計つてあるのか。

千花はぼうつとしながら、それを受け取った。

「……脇の下に挟めばいいんですか？」

「はい、そうです」

どうやら、使い方も元の世界と一緒にようだ。異世界なのにちよつと面白いなど、具合は悪かったが千花は少し笑いたくなる。

千花が熱を計っているその間に、ハロルドは彼女の手首になにやら巻いて測定しているようだ。

そろそろいいでしょうと言われて千花はハロルドに体温計を返す。「風邪のようですね。昨日から王宮に來られたことで、疲れも出たのでしょうか。少し熱が高いようですから安静になされてください」

「はい、ありがとうございます」

千花はベッドに横になりながらハロルドに礼を言う。

それから侍女達にいろいろ指示した後、ハロルドは帰っていった。

「……ティカ様、食欲はないとのことですが、スープは飲めますか？ お薬も飲まないといけませんし」

「あ、はい」

エイミに起こしてもらって、ティカはぼうつとしながらもこぼさないように注意しつつ、コーンスープに似たものを口に運ぶ。……これならなんとか口に入れられそうだ。

震える手でスプーンを持ちながらスープをすくい、なんとか全部

飲み終わると、粉薬を一包み渡された。

「熱冷ましですわ。後でカイル様にも来て頂きますので、かなり症状は良くなられると思います」

白湯で熱冷ましを飲んだ千花はなんでカイル？ と首を傾げた。

「あの、カイル、来るんですか？ 魔術を教えに？」

「まあ、ティカ様の具合が悪いのに、そんな訳はありませんわ。

カイル様にはティカ様に治癒魔法を掛けていただくのです。……それと、ティカ様、わたくし達に敬語は不要です。どうか普段通りに振る舞われてください」

それから、ディアナとエイミが紹介が遅れましたが、とそれぞれ挨拶をしてくる。

エドアルドの客人で、高名な魔術師のカイルの弟子であるティカは、王宮でもかなりの重要人物であるので、一介の侍女である彼女達に敬語など使われると、逆に困るそうだ。

千花は少し迷ったが、エドアルドの客人という立場もあるし、ここは彼女たちの希望通りに振る舞った方が良さそうだと判断した。

「それではティカ様、よくお休みになられてくださいませね。もし、具合が悪いようでしたら、そこにある呼び鈴でわたくしどもをお呼びください。すぐに参りますから」

「うん」

千花は呼び鈴を確認すると頷いた。

「それではおやすみなさいませ、ティカ様」

「うん、おやすみなさい」

千花が再びベッドに横になると侍女達は退室していった。

ああ、こんな時に早速風邪引くなんてついてないなあ。

それにカイルに魔術を早急に習わなきゃいけないのに。

千花は自分の情けなさに溜息を付くと、徐々に襲ってきた眠気に身を任せた。たぶん、薬の中に眠くなる成分でも入っていたのだろ

う。

次に千花が目覚めた時には、ベッドの傍にカイルが立っていた。

「……カイル？」

「治癒魔法を掛けたが、気分はどうだ」

言われてみれば、だるさがだいぶ無くなったようだ。

「うん、だいぶ良くなったみたい」

今度は自力で千花はベッドから身を起こす。すると、なぜかカイルが少し動揺した。

「おまえは何か羽織れ。その格好では体の線が丸分りだ」

「そうは言っても……」

周りを見渡すが、羽織るようなものはない。千花は呼び鈴で侍女を呼び出した。

「まあ、気が付きませんで申し訳ありません」

エイミが慌てて千花に繊細な刺繍のされている上等そうな肩掛けを羽織らせた。

「それで、カイル様、ティカ様の具合は良くなりましたのでしょうか？」

「ああ、心配ない。疲れもあるだろうから、三日は療養した方がいいが」

カイルの言葉に千花は驚いて目を見開く。

「まあ、それでは殿下にティカ様の体調が快方に向かわれたことをお知らせしてまいりますわ」

エイミが心底安心したように言って、千花の寝室を出ていった。

「三日も寝てなくちゃいけないの？ 今日一日休めば大丈夫だよ」

早く魔術を覚えて元の世界に一刻も早く帰らなければならぬ千花は気が焦っていた。

「……無理はするな。おまえのこの症状は、たぶん異世界を渡った

衝撃のせいでもあるんだろう」

「……そうなの？」

「ああ。異世界召喚は対象物に負担を掛ける場合もあるからな」

「それが分かかって、召喚するなんて酷いよ」

カイルが鬼畜魔術師だとは分かっていたが、そんな説明もされていなかった千花は憤る。

「ああ、そうだな」

その千花の怒りにカイルはかなりあつさりとした応えを返した。

「……それだけ？」

悪いとか、すまなかったとか謝罪はないの？

召喚して千花が魔法を覚えるまで帰す気はないと宣言しているカイルに半ば諦めてはいたが、このときの千花は具合が悪いせいもあって、カイルの態度にかなりいらいらしてしまった。

「そうだなって、それだけ？　せめてすまないぐらい言ったらどうなの。カイル、酷すぎるよ」

瞳に大粒の涙を溜めて千花が訴える。

「……そうだな」

それでもカイルからの謝罪はない。

千花は具合が悪いのやら、この先の不安やらを全て彼への憤りに変えてカイルを詰った。

「わたしが今こんな目に遭ってるのは、全部カイルのせいなのに。カイルなんて大嫌いっ」

「……そうか」

一瞬、彼が寂しそうな顔になったと思ったのは千花の気のせいだったか。だが、千花はそれをあまり気にせずにカイルに言った。

——出てきたそれは懇願。

「わたしを帰して。帰してよ」

千花は泣きながらカイルに訴える。

「すまない。それは出来ない」

俺様なカイルが初めて謝ったが、元の世界に帰してくれなければ、結局意味はない。

千花はぼろぼろと涙をこぼしながらカイルを責めた。

「酷い、酷いよ。カイル、酷い」

「ティカ、あまり気が高ぶるとまた具合が悪くなる」

誰のせいなの、と千花は叫びたかったが、カイルにそつと額を指で押された。

すると、急激に眠気が襲ってくる。どうやらカイルが魔法で何かしたらしい。

くたりと力が抜けた千花の体をカイルが支えた。

千花の頬に涙が伝う。瞋になにか柔らかいものが押し当てられたが、千花には確認するすべもなく、深い眠りに落ちていった。

10 王太子妃

「カイル、やっぱりティカのことを好きなんじゃないか」

カイルは意識のない千花を寝台に横たえたと声のした方に振り返った。

寝室の入り口にはエドアルドとレイナルドが立っていた。

「意識のない女性の眦に口づけるなんて、普通弟子にはしないな」

エドアルドが言うと、カイルは少し眉を顰めた。

「……それがどうした」

「開き直りか。けれど、ティカは渡さないよ。僕の妃にするんだ」

「ティカは俺の弟子だ。第三王子の妃にはさせない」

「それは、おまえがティカのことが好きだからだろう？ カイル」

睨み合う二人の脇をすり抜けて、エドアルドがティカの頬に伝う涙を拭った。

「かわいそうに、ティカ。かなり気に病んでいたんだね」

「ティカに触れるな」

カイルの不遜な態度にもエドアルドは特に気にした様子もなく、涙の跡の残る千花を見つめていた。

「まあ、皆様、ご病気の方の寝室で騒がれるのはおやめくださいませ。隣室にお茶をご用意いたしましたので、そちらにお越しく下さい」

セルマが寝室に入ってきて諫めたことで、とりあえず険悪なその場は収まった。

「……俺は帰る。ティカは三日は療養させろ」

そう言うと、カイルは移動魔法でその場から消えた。

「なんだよ、これから追及しようとしてたのに逃げるなよ」

「……レイド、ティカの素顔を見たのに態度が変わらないな」

エドアルドが意外そうに眉を上げて言うと、レイナルドは頷いた。「うん、確かに顔立ちは幼いけれど、やっぱり十二歳には見えない

よ。それに、カイルに帰して欲しいと懇願した時のティカは今まで見た以上に艶っぽかったし。僕の彼女への気持ちは変わらないよ」

「確かに、あの時の彼女には思わずぞくりとさせられたな。セルマの言うとおり、いずれ彼女は美しく花開く時がくるのだろう。数年後には求婚者がひしめいているかもしれないな」

「そんなことにはさせないよ。彼女は僕の妃にするんだから。……アルド兄さんにも手を出させないよ」

エドアルドは挑戦的なレイナルドの言葉には答えず、話題を変えた。

「……しかし、ティカはカイルの言うとおり三日は療養させるとしても、しばらくはあまり過密な予定を立てない方がいいな」

エドアルドは顎に手を当てて考えるように言うと、話題を変えられたレイナルドも不承不承頷いた。

「そうだね、あまり無理はさせない方がいい。なんといつても、ティカには慣れない環境なんだから」

「まずは礼儀作法と魔術を習うことくらいか。それでもティカには大変だろうけれども彼女に頑張ってもらうしかないな」

エドアルドが小さく息をついて言うと、レイナルドは彼女の身を案じながらも同意した。

それから三日後。

千花の部屋の隣の客室で、朝食会が開かれていた。

侍女によって千花は再びお姫様そのものの格好をさせられている。

「ティカ、もう体の方は大丈夫かい」

「はい、もうすっかり。ご心配をおかけして申し訳ありません」

千花はエドアルドとレイナルドに頭を下げた。

「かなり疲労が溜まっていたんだろうから、君は謝らなくてもいいんだよ。君の体調のことまで気が回らなくて申し訳なかったね」

エドアルドに頭を下げられて、千花は慌てた。

「そんな、エドアルド殿下、わたしに頭を下げられないでください。そんなことされたら困ります」

「そうか、ではとりあえずやめておこう」

冗談めかして言われて、千花も思わずくすりと笑った。

「あ、あとお二人ともお花ありがとうございました。なにもする事がなかったので、とても嬉しかったです」

三日も療養することになって暇を持て余した千花は読書でもするかと本を広げたが、言語疎通の指輪は文字までは面倒を見てくれなかったようだ。

当然なにが書いてあるか分からない千花は、所狭しと花瓶に生けられた花々を眺めて過ごした。

それに、毎日王子二人が訪ねてきてくれてかなり助けられた。

こんなことになった原因のカイルはあれから姿を見せなかったが、ひょっとして大嫌いと言ったせいなのかもしれないな、と千花はふつと思った。

そのカイルも一応悪いと思ったのか、彼から大きな花束が連日届けられていた。

「ティカは花が好きなのかい？」

「え、まあ、人並みには好きです」

エドアルドに聞かれて、千花は頷く。

「そうか。なら、庭園に君を連れていこうか。ここの庭園は手入れが行き届いているから、君も楽しめると思うよ」

「そうなんですか？ 是非見たいです！」

そんな娯楽があるなら是非見たい。

千花はエドアルドに喜色満面の笑顔で言った。

「ああ。じゃあ、この後行こうか」

「はい」

思ってもいなかった展開に、千花はにこにこして頷いた。

「でも、驚いたよ。君がいきなり高熱を出して寝込んだんだから。」

良くなって本当に良かったよ」

レイナルドが急に話題を変えると、千花は彼に手を取られる。

「あ、あの……っ」

千花が彼の熱っぽい視線に戸惑っていると、エドアルドが助け船を出してくれた。

「レイド、ティカが困っているだろう。その手を離せ」

「……アルド兄さんがそう言うのは、ティカに気があるからだろう？ ティカに触れさせたくないからだ」

「……確かに、わたしはティカに惹かれているし、彼女に触れさせたくはないな」

……はい！？

予想もしなかったエドアルドの言葉に千花は驚いて、思わずエドアルドの顔を見た。

「ティカ、いきなりで驚くかもしれないが、わたしは君を妃にしたいと思っている」

こ、これは、殿下のからかいの延長だろうか？ うん、そうに違いない。

千花は自分で納得する答えを見つけると、心の中で大きく頷いた。
「エドアルド殿下、わたしをからわれるのはおやめください。言われていい冗談と、そうでないものがあります。殿下のこのご冗談はたちが悪いです」

「……まいったね。わたしは求婚のつもりで言ったのに、冗談にされてしまうとは」

きゅうこん、求婚！？

千花は心底驚いてエドアルドの顔をまじまじと見つめた。彼の顔は真剣そのものだ。

千花が彼の視線に思わずひるんでいると、レイナルドがエドアルドを挑戦的に睨んで言った。

「ティカに求婚したのは僕が先だ。アルド兄さんにティカは渡さないよ」

二人の王子の間で火花が散った気がして、千花はあたふたする。

どどどうしよう、こんなときはどうしたら！

うまく働かない頭で千花は、先程エドアルドが言った庭園のことを思い出した。

「あ、あのつ、わたし、庭園に行きたいです！ それも今すぐ！」

なんとか二人の王子の暴走を止められた千花は安堵の息を付いていた。

二人に案内された庭園は確かによく手入れされていてとても綺麗だ。緩やかな風が花びらを舞い上がらせて、幻想的でさえある。

……しかし、チューリップとムスカリが咲いているその近くで、もう少し花期が先と思われるハーブと薔薇の花が咲いていて、季節感がまるでない。

……ここの植物体系はどうなってるんだと千花は首を捻りつつ、それでも美しい花々を堪能した。

「あ、桜！」

まさか異世界で桜を見られるとは思わず、千花は歓声を上げる。

「ティカは桜が好きなのかい？ それなら、少し離れた場所に立派な桜並木がある。よければそのうち案内するが」

「そうなんですか？ ぜひお願いします！」

エドアルドの提案に、千花は一も二もなく飛びついた。

「もちろん、僕も付いていくよ。アルド兄さんばかりに良い思いをさせたくないし」

「レイド、おまえは呼んでないぞ。……まあ、聞かれた以上仕方な

いか」

エドアルドが本当に仕方なさそうに苦笑する。

「まあ、エドアルド様、レイナルド様、おはようございます」

ふいに柔らかな声がして三人はそちらに振り返った。

そこには波打つ淡い金の髪と水色の瞳のとても綺麗な貴婦人がいた。

「おはようございます、義姉上」

王子二人が義姉上と呼ぶところを見ると、この人物は未だ千花が会ったことのない王太子の妃のようだ。

「——黒髪に焦げ茶の瞳。とても綺麗な方ですけど、そちらにいらっしゃるの、もしかしてカイルのお弟子ではないですか？」

そう言われて初めて千花は目の前の人物がカイルによく似ていることに気が付いた。

もしかしてこの人は——。

興味深そうに自分をまじまじと見つめてくる人物がカイルの関係者ということを感じ取り、千花はしばし呆然としていた。

11 王太子、まさかの登場

「ええ、そうですよ義姉上。彼女はティカ・サトー。十六歳です。いろいろありまして、彼女はわたしの客人としました」

呆然としているティカに変わって、エドアルドが如才なく返した。「まあ、エドアルド様の客人なら妙な貴族に手を出されはしないでしようから、安心ですね。……それにしても、こんなに美しい方を弟子になんて、カイル大丈夫かしら？ きちんと魔術を教えられるのかしら？」

「その点は我々が目を光らせていますので大丈夫ですよ、義姉上」
レイナルドが笑顔で美しい貴婦人に言う。

「……まあ、そうですね？ それはそれで、なにか寂しい気もするのですけれど。カイルは今ままであまりそういうことに興味がないようでしたから。……それはそうと、ティカ様でしたかしら」

「あ、はい」

突然名を呼ばれて千花は緊張する。

それが伝わったのか、貴婦人はくすくす笑った。

「まあ、わたくしにそんなに緊張なさらなくても大丈夫ですわ。……わたくしはカイルの実姉のコーデリアと申しますの。今の身分は王太子様であるルイスガルド様の妃なのですけれど」

王太子の妃というのは王子達の前後の会話から分かってはいたが、カイルの実姉だったとは、千花は素直に驚いた。

王太子妃ということは、結構いいところの出だね、と千花はちらり考える。

カイルの王子達に対する不遜な態度は、彼の魔術の実力以外にもそういうところからも出ているのかもしれない。

「まあ……、よく似ておいでだったので、もしかしたらと思ってはいたのですが、本当にそうだとは思いませんでした」

千花はなんとかそう返すと、目の前の美しい王太子妃を観察した。

……確かに色合いや顔立ちは似ているが、性格はカイルと違ってとてもやさそうだ。

「ティカ様、もしよろしかったら、この後、わたくしのお茶会に参りませんか？」

コーデリアがどこまでも無邪気に千花を誘ってくる。

「え……、けれどわたしが伺ってお邪魔ではないでしょうか。わたし礼儀作法も駄目ですし、王太子妃様に非礼を働かないとは言いきれませんが」

「まあ、そんなことお気になさらないで。わたくしはまったく気にしませんから。……それに、わたくし、あなたがカイルの弟子になったいきさつについて詳しく知りたいのですわ」

熱心に薦められるが、まともに敬語も扱えない千花としては少し荷が重い。

「あ、あの……」

どうやって断ろうかと千花が思案していると、見かねたらしい王子二人が助け船を出してくれた。

「義姉上、もしよろしかったら、我々も参加してよろしいでしょうか。ティカは病み上がりなので少々不安なのですよ」

「ティカはこの国のことに不慣れなのです。彼女もだいたい不安のようですよ」

エドアルドとレイナルドがそう言ったことで、コーデリアは瞳を見開いた。

「……まあ、そんな時にお誘いしてしまつて申し訳なかったですわ。それにしてもティカ様、エドアルド様とレイナルド様にとっても大事になさられているのですね」

「そ、そんなことは……」

「ええ、それはもう。僕は彼女を妃にと考えていますから」

「わたしも同じくです」

千花が否定しようとする側から、王子二人が問題発言をしてくる。それに対して、コーデリアは頬を紅潮させると両手で覆った。

「まあまああつ。ティカ様、凄いですわ。エドアルド様とレイナルド様のお心を同時に掴まれるなんて！」

アクアマリンのような瞳をきらきらと輝かせると、コーデリアがずい、と身を乗り出してくる。

「え、でも、お二人とも化粧に誤魔化されているだけかと。わたしの素顔はかなり幼いですし」

まさか見た目十二歳の顔の女に惚れる男はいないだろうと、この時の千花は本気で思っていた。

「わたし達二人とも、君の素顔は知っているし、対外的にも化粧でこれだけ美しく装えるんだからなんの問題もないだろう」

「うん、だから安心してティカは僕を選んでくれていいよ」

「レイド、どさくさに紛れてティカを口説くな」

エドアルドがむっとして顔をしかめると、コーデリアが一瞬瞠目して、次の瞬間にはくすくすと楽しそうに笑った。

「まあ、エドアルド様のそんなお顔初めて拝見しましたわ。余程、ティカ様に心を奪われていらっしゃるんですね」

「……そ、そんなこと……」

こうなると、千花は真っ赤になって俯くしかない。

第一、王子二人が自分のことを妃にしたいというのも未だ信じられないのだ。

「ふふ、ティカ様、とてもお可愛らしいですね。なんとなく、殿下方が夢中になれるのが分かりますわ」

コーデリアがティカの手を取って微笑む。

……いや、普通夢中になるならこういう方だよなあ。とても綺麗だし、性格も良さそうだし。……王太子妃というのが一番の障害だけれども。

千花は両手を柔らかな手に包まれて考える。

この王子二人の美意識というか、好意を持つ基準というのが千花にはさっぱり分からない。

「——コーデリア、ここにいたのか」

少し低い男性の声がしたかと思ったら、王太子妃は王子二人を更に男性的にした感じの人物にいきなり抱きしめられていた。それだけでは終わらず、熱い口づけまで付いてくる。

「……ルイス、殿下方の御前ですわ」

コーデリアが頬を染めて男性に抗議する。

「かまわん。どうせ二人とも慣れているだろう」

どうやら彼が王太子らしい。

かなり予想外の登場の仕方だったので、千花は思わずぽかんとしてしまった。

対する王子二人は、仕方ないなどとも言つように苦笑している。

「起きたら、寝台におまえの姿が見えないので探したぞ。コーデリア、おまえは勝手に行動するな」

「まあ、侍女や近衛の者には伝えておいたはずですわ。ルイス、大袈裟すぎです」

ええと、それは察するに、お二人は朝までいちゃいちゃとベッドに一緒にいて、目覚めた時には妃の姿が見えなかった王太子が心配してお妃様を探しに来たつてことだね。ちょ、ちよつと刺激の強すぎる話かも。

千花は頬を染めながら思わず呟いた。

「らぶらぶなんですねえ……」

「……らぶらぶ？」

皆に一斉に注目されて、千花はそれにたじろぎながらも説明する。

「ええと、わたしの国の言葉で、夫婦や恋人同士が仲睦まじい様子を表した言葉です」

千花が言葉を発したことで、ようやく存在を認識したらしい王太子が彼女に向けて言葉を発する。

「……どうやら異国の者らしいが、何者だ？」

「彼女はカイルの弟子で、わたしの客人です」

エドアルドが千花がなにか言う前に受け答えしてくれたので助か

った。きつと王太子の前ではしどろもどろになっていただろうから。
「……カイルの弟子？　そうか、それでは士官の件は立ち消えか」
「なんでもカイル以上の魔力の持ち主らしいですよ。魔力を計る魔道具では測定不可能でした」

「それは純粹にすごいと思うけど、ガルド兄さん、僕はティカを妃にしたいんだ。できれば彼女を魔術師にしたいくない」

「レイド」

エドアルドがレイナルドをたしなめるように名を呼んだ。

「……しかし、それだけの魔力の持ち主なら魔術師を目指すのが一番だろう。カイルをも上回る魔力の持ち主の才能をみすみす見逃すような真似は国家の損失だ」

先程までの暴走っぷりが嘘のように、王太子は厳しい口調で言った。

「ルイスガルド、ティカ様はエドアルド様からも求婚を受けておられるのですわ。あまり国家のことを持ち出すのはティカ様がおかしいそうですわ」

「そうか、それならば魔術師として修行をしつつ、二人の妃候補とするのもいいかもしれないな」

コーデリアが口を挟んだことで、ルイスガルドは考えをあっさり改めたらしい。

けれど、千花には二人の妃候補になるなんて気は毛頭なかった。

「あ、あのっ。お言葉ですが、わたしはエドアルド殿下とレイナルド殿下の妃候補になるつもりはありません」
「なぜだ」

千花の言葉が意外だったらしく、ルイスガルドが目を瞠る。

「わたしはカイルに召喚されてこの世界に来ました。……ですから、召喚魔法を覚えたらわたしは家に帰るんです」

ルイスガルドとコーデリアは千花の言葉に心底驚いたらしく、千花を凝視した後、お互いの顔を見合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177ba/>

魔法の国のティカ

2012年1月13日17時55分発行